

# 強者の戦略

論述世界史〔1995年 東京大学 第2問より〕

こんにちは。研伸館の世界史の北林です。今回は1995年の東京大学の第2問から、インド近現代史の問題に挑戦していただきました。

古い問題ではありますが、これまで何度もインド近現代史の問題が出題されています。東京大学では帝国主義時代のイギリスに関する問題が何度も出題されていますが、イギリスにとってインドは外すことができないところですから、時代の変遷、用語の確認、それらをしっかり復習しておかなくてはならないところですね。

また京都大学でもインドの近現代史を300字で出題したことがありますので、油断はできません。

## <時代背景を確認>

インドへの西欧の進出はすでに大航海時代から見られます。大航海時代以降はアジア市場を巡る攻防が繰り返されます。1498年にヴァスコ＝ダ＝ガマがカリカットにたどり着き、インド航路を開拓したポルトガルは1510年にゴアを拠点にします。ここをアジア貿易の拠点として、ムスリム商人と競合しつつ、セイロンやマラッカ、香辛料のモルッカ諸島などを押さえていきます。

17世紀にはオランダがポルトガル商人を排除しつつ、香辛料貿易の実権を握っていきます。セイロンも支配していきます。東南アジアでは香辛料を巡る争いの末、1623年のアンボyna事件でオランダに敗れたイギリスがインドへの進出を本格化させます。拠点はわかりますか？マドラス(現チェンナイ)、ボンベイ(現ムンバイ)、カルカッタ(現コルカタ)が基地となります。

ライバルとなるフランスも絶対王政を確立する中、コルベールによる重商主義政策のもと、インドへ進出します。フランスの拠点は、ボンディシェリ、シャンデルナゴル、ですね。これらを拠点にイギリスに対抗します。

この当時はまだムガル帝国が強大です。ムガル帝国では3代目アクバル以降、4代目・5代目とイスラームとヒンドゥーの融和を図り、大帝国を築いています。イギリスやフランスは、この段階では侵略というより、ムガル皇帝や現地の有力者の許しを得て東インド会社の拠点を置き、貿易をおこなっている段階です。ただ、第6代のアウラングゼーブの時代以降各地で反乱がおこるようになると、地方の豪族なども巻き込んで、イギリスやフランスは勢力争いを展開していきます。

さて、そうした背景の中、今回問われているのが、ベンガル地方の歴史です。ベンガル地方はインドで最も人口の多い地域でした。ここにはカルカッタやシャンデルナゴルといったイギリス・フランスの拠点があります。

## <問われていることを確認>

主問は「植民地支配との関係や独立の仕方を中心に、18世紀なかばから1947年までのベンガル地方の歴史」です。ただ、問題には「ベンガル地方はイギリスによるインド植民地支配上の重要地域で、ここではイギリスのインド支配全体の成立と変遷の上で画期となる事柄や事態が生じている。この点に留意して…」とあります。慎重に一つずつ、出来事を確認していかなくてはなりません。書き始めは18世紀なかばからですからイギリス・フランスが争い、最終的にはフランスを追い出してイギリスが支配するところあたりからとなります。では、1947年は？これはインドの独立です。ただし、ただ単にインドが独立しました、ではいけません。ベンガル地方はどうなっているのか…よく地図をみてくださいね。この地域はインドと東パキスタン (1971年からはバングラデシュ)に分かれています。うっかり書き忘れてしまいそうになりますが、ここがすごく大事になります。

# 強者の戦略

## ○イギリス・フランスの争い



研伸館のテキスト『体系化する世界史』より

18世紀半ばからですので、イギリス・フランスが争っていたことから考えましょう。ヨーロッパでオーストリア継承戦争や七年戦争が起こっていますが、それに連動してイギリス・フランスは新大陸やインドなどで戦争をしています。

カーナティック戦争もありますが、それはインド南部なので、ベンガル地方となりますとプラッシーの戦いを書きたいところです。

## ○プラッシーの戦い以降のイギリス

プラッシーの戦いでは、イギリス東インド会社の傭兵軍を率いたクライブが、フランス・地方政権の連合軍を破り、ここでイギリス領インドの基礎が築かれます。1763年のパリ条約でイギリスの勝利が決定的となります。

その後イギリス東インド会社はインド内部の諸勢力に対しても支配を広げていきます。ベンガルやビハール地域の徴税権を獲得します。それ以降、マイソール戦争、マラーター戦争、シク戦争などに勝利をしていきますが、これらの戦争はベンガル地方に

は直接関わらないので、解答には含まなくてよいでしょう。

その後、イギリスは産業革命を経て自由主義が強くなると、産業資本家たちの力が強まり、東インド会社の貿易独占が廃止されたり、また1833年(実施は翌年)東インド会社の商業活動そのものが止められます。東インド会社は商業のための組織ではなく、インドの統治者の位置づけとなります。

## ○イギリスのインド統治と民族運動

19世紀の後半、東インド会社の傭兵であるシパーヒー(セポイ)による反乱が発生し、インド全域に反乱が広がりました。反乱の直接のきっかけはシパーヒーが使用する新式銃の弾薬包に豚と牛の脂が塗られていたこと、という話が有名ですが、それ以外にも藩王国の取り潰しや、その他植民地政策に対する反発が背景にあったと考えられます。その後、東インド会社は解散、ムガル帝国は滅亡、イギリスはインドを直接支配し、1877年にはインド帝国を建て(初代皇帝はヴィクトリア女王)、以後、直接支配を行っていきます。

イギリスは「分割統治」といわれる、インド人同士の対立を生み出すような政策を行っていきます。特にヒンドゥーとイスラームのずっと昔からある対立を巧妙に利用して支配していきます。

インドでは留学経験のあるエリート層を中心に、民族的な自覚を持つ階層が出現していきました(反英の組織として全インド国民協議会がつけられます)。そうした背景からインド人の意見を諮問する機関として、1885年にインド国民会議が結成されます。当初は対英協調組織でしたが、次第に民族運動の中心となっていきます。インド人なら誰でも入れる組織なのですが、ヒンドゥー教徒が多い組織でもありました。1905年にベンガル州をヒンドゥー教地区とイスラーム教地区に分けるベンガル分割令が出されました。これに対しインド国民会議は反英に転換します。1906年のカルカッタ大会では4綱領を決議し、

# 強者の戦略

国民会議は反英の政治組織の国民会議派と変貌したのです。これに対しイスラーム教徒はインド総督の影響もあって、親英の全インド＝ムスリム連盟を結成します。これ以降、イギリスはインドの民族運動を沈静化するため懐柔策として、一部のインド人を行政組織に参加させるなどし、また 1911 年にベンガル分割令を撤回する一方で、インド帝国の首都をカルカッタからデリーに移すこととなります。

## ○第一次世界大戦後の民族運動

第一次世界大戦中、イギリスはインドの戦後の自治を約束して、戦争への協力を求め、インドはこれに応じて戦場に若者を送りました。しかし大戦後、1919 年に出されたインド統治法は自治とはほど遠い内容で、これと同時に弾圧のためのローラット法が出されます。パンジャブ地方のアムリットサルでは反対集会に集まった人々にイギリス軍が発砲して多数の死傷者を出す、いわゆるアムリットサル事件が起こります。

この後、1919 年に国民会議派のガンディーを中心とする第一次の非暴力不服従運動(サティヤグラハ運動)が起こり、これには全インド＝ムスリム連盟も同調します。1922 年には農民による警官殺害事件で運動が停止し、以後、ヒンドゥーとムスリムの対立が深まります。国民会議は反イギリス路線、ムスリム連盟は反国民会議・親イギリス路線となります。

1920 年代後半にあると、民族運動が再び激化し、パンジャブのラホール大会でプールナスワラージ(完全独立)が決議されます。第二次非暴力不服従運動も 1930 年から再び起こります。イギリスは英印円卓会議を開き、抱き込みを図りますが合意は得られず、その後州レベルの自治を認める新インド統治法を出しますが、それでも独立にはほど遠いものでした。

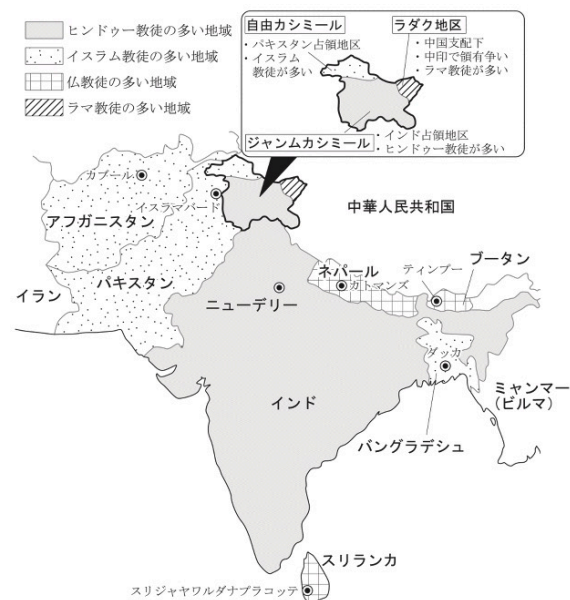
このあたりは今回の問題では書かない内容ですね

## ○分離独立へ

ジンナーを指導者とする全インド＝ムスリム連盟は、1940 年に新たにイスラームの国「パキスタン」の建設を目標に掲げました。つまり分離独立を目指したのです。ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が統一して独立することを望んでいた国民会議派とは意見が分かれましました。

第二次世界大戦後の 1947 年にはインド独立法が制定され、ヒンドゥー教徒を主体とするインドと、イスラーム教徒を主体とするパキスタンに分かれて独立することになります。ちなみにパキスタンは西パキスタンと東パキスタンで一つの国です。ベンガル地方は、インドと東パキスタンに分かれるんですね。

その後 1971 年に東パキスタンは西パキスタンに反発し、バングラデシュとして独立します(これがきっかけで第三次インド＝パキスタン戦争が起こっています)。



研伸館のテキスト『体系化する世界史』より

# 強者の戦略

## 【解答例】

英はブラッシーの戦いに勝利、ベンガルの徴税権を握りカルカッタに総督をおいた。国民会議派はベンガル分割令で反英化し、カルカッタ大会で自治を求めた。全インド=ムスリム連盟は国民会議派に対抗、分離独立時に西部はインド、東部はパキスタン領有となった。(120字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？実際の入試では速く解かなくてはなりません、短い文章でも、書く内容を一つ一つ丁寧に挙げていかななくてはなりません。

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と気になるところが出てくると思います。その際は遠慮なく質問してください。

そして添削を希望される方も遠慮なくおっしゃってください。

ではまた次回、お会いしましょう

北林久忠